

きらっと小阪商店街

筆者が教鞭を執る大阪商業大学は、東大阪市にあります。最寄り駅は近鉄奈良線の河内小阪駅。そこから北東に歩いて5分くらいで大学に着きます。大学の正門前にはハウス食品の本社(発祥地)があり、駅から離れると工場と住宅が建ち並ぶ地域です。

駅から大学までの間に、5棟の中層ビルがあります。小阪近鉄ビルです。1階は商店。

2階から上が住居や事務所として使われる3階~5階建て。建設されたのは1960年代前半。電車の車庫跡を再開発したそうです。ビルの持ち主は近鉄不動産、賃貸(定期借地権かもしれない)ビルです。

小学生の筆者は父に連れられて、花園ラグビー場へ高校ラグビーを毎年観に行っていました。ある年に突然現れたビル群の美しさに驚いたことを覚えています。都市の未来像をそこに見た記憶があります。その最先端のビルも、建築後50年以上が経過。どうやら再開発しないとイケないようです。地域の再開発を行うためには、住民の立ち退きが必要になります。筆者がよく行く蕎麦屋やお好み焼き屋なども、立ち退きの対象になります。

この商店街は、店主同士が仲が良いようです。商店会で旅行に行ったり、昼間も店の前で店主同士が雑談されたりしています。お互いの情報も筒抜け。誰がどこの出身でどんな暮らしをしているのか隠せない場所です。



▲きらっと小阪商店街

隣り合った数軒のお店の出身地を聞くと、2軒の喫茶店のママが九州出身。お好み焼き屋さんは鳥根県出身。地方から出てきて、生活基盤を築き、この商店街で起業をして、人生を送ってこられました。生活と仕事が密着した場所ですから、商店街は生活コミュニティにもなっているわけです。それを作り上げるために長い時間の努力が蓄積されています。

最初にビルを作り、インフラを作ったのは不動産会社。そのインフラの上に心地よいコミュニティを作ったのは商店主たち。そのコミュニティを崩壊させるきっかけを作るのも不動産会社。辞令で職場を決められ、その職場をよい仕事コミュニティに作る努力をする組織人。何年かの後、組織改定でそのコミュニティが壊れ、新たなコミュニティを作らないとイケない組織人。そんな対比を思い浮かべながら、話の進み方を気にしています。

(MBO実践支援センター代表 大阪商業大学特任教授)

